哲学基礎文化学系ゼミナールⅡ
2009/05/07・14

「道徳感情論」入門 --- D. ヒュームとA. スミスの倫理思想---

林 誓雄(文学研究科 倫理学専修)

0. 倫理学とはどのようなものか？

・倫理学ethicsとは、規範normや価値valueに関する哲学の一分野

・「われわれはいかに生きるべきか、その理由はなにか」を体系的に理解しようとする学問

・狭い意味では、生きていく上での問題にわれわれが直面したとき、「どのようにすべきか」ということに関する指針を与えてくれるもの

本講義の目的

倫理学における「理性主義」と「感情主義」というもの(対立)をおさえてもらう

今週の目標

デイヴィッド・ヒュームの倫理思想における「道徳判断の仕組み」を理解する

1. 倫理学の三本柱

[1] 徳倫理学：正しい行為というより、「よい人」を目指すべきだという考え方

アリストテレス、F. フット、A. マッキンタイアetc.

[2] 義務論：幸福なんかよりも義務が大切という考え方

I. カントetc.

[3] 功利主義：みんなが幸福になるようにするのが正しいという考え方

J. ベンサム、J. S. ミル、H. シジウィック、R. M. ヘアetc.

2. 理性 vs. 感情 ---カントの倫理思想---

イマヌエル・カントImmanuel Kant[1724-1804]

・人間とは、理性的存在者でありながら感性的刺激にも晒されている存在

・仮言命法 と 定言命法

・道徳では、いつでもどこでも誰にでも妥当する**普遍性**が大事

[引用-1]

「汝の格率が、普遍的法則となることを、その格率を通じて自分が同時に意志できる格率に従ってのみ行為せよ」(『道徳形而上学の基礎付け』p.42 / IV421)

[Cf. 内井[1988]-1]

人が自分の意志決定をするための主観的規則(＝格率)が、同時に普遍的法則になることも彼が意志できるような、そういう法則に従ってのみ、人は行為すべきである。

[Cf. 内井[1988]-2]

すべての理性的な人が、すべての人に適用されることを望み、かつ自分も同意できるような、そういう規則に従ってのみ人は行為すべきである。

◆ カント倫理学の性格

1. 「道徳」から「感性的要素」の完全排除

2. 道徳における普遍性の重視

3. 理性を信じ、自分で考える倫理学？

◆ カント倫理学の問題点

・厳格主義

・形式主義

・義務同士の衝突

ハインツのジレンマ

ローレンス・コールバーグ(米の心理学者)のたとえ話。ハインツの奥さんは病気で、ある薬を飲まないと死んでしまう。その薬を持っているのは町のとある薬屋だけであるが、薬屋は強欲で、ハインツにはとても払えないような大金を要求している。ハインツは八方手を尽くしたがそんな大金は集めることができなかった。ハインツは薬屋に忍び込んで薬を盗む。これは許されることだろうか？このジレンマでは、他人のものを盗んではならないという義務と、自分の妻の命は助けなくてはならないという義務が衝突している。(伊勢田[2008]より。原典はLawrence Kohlberg, “Stage and Sequence: The Cognitive-Developmental Approach to Socialization,” in D. A. Goslin ed., *Handbook of Socialization Theory and Research*, Rand McNally, 1969)

・感情・欲求の位置

美しき魂schöne Seele

シラーによるカント批判。カントの厳格な道徳律は人間に、結局は感性や傾向性を考慮することなくもっぱら理性の原理に従うことを要求する。これに対してシラーは、完全な人間の理念をこれら二つの原理が調和した心の状態に求める。これが「美しき魂」である。それは、感情の赴くままに自発的に行なわれた行為が、同時に意志の命令に合致するような境地である。(『カント事典』より)

3. 理性 vs. 感情 ---ヒュームの倫理思想---

「道徳感覚学派Moral Sense School」

シャフツベリ伯(第3代)[1671-1713]：イングランドの道徳哲学者、美学思想家。徳と美の直観的能力として「道徳感覚moral sense」を重視。のちのハチスンやバトラーなどに影響を与える。祖父の侍医でもあったジョン・ロックに教育を委ねられ古典語に堪能であった。

フランシス・ハチスン[1694-1746]：18世紀アイルランドの道徳哲学者。『美と徳の観念の起源』[1725]では、ロックの認識論を踏まえつつ、「道徳感覚」を提唱し、仁愛benevolenceという利他的動機を道徳的善と規定する。自然法学を踏まえた社会科学的な洞察は、ヒュームとスミスに批判的に継承され、スコットランド啓蒙思想の展開に大きな影響を与えた。

以上、『イギリス哲学・思想事典』より

デイヴィッド・ヒュームDavid Hume[1711-1776]

・18世紀スコットランドの哲学者、歴史家。

・『人間本性論』[1739-40]、『人間知性の探求』[1748]、『道徳原理の探求』[1751]、『イングランド史』[1754-62]etc.

理性主義的道徳説[S. クラーク、ウォラストン]批判

・道徳とは実践的なものである！

・道徳とは観察者の外側に実在しているものではない！

[1] 道徳の実践性

[引用-2]

「理性は情念の奴隷であり、かつ奴隷でのみあるべきであって、情念に仕え、それに従う以外のつとめを何か持っていると主張することは決してできない。」(T 2.3.3.4)[1]

※ 注意！

ヒュームは「道徳」に「理性は不要」と主張しているのではない。われわれ人間が生きていく上で、情念単独では無理であり、情念を導く案内役(理性)が必要。

[1] ヒューム『人間本性論』への引用・参照は、略号としてTを用い、巻号、章番号、節番号、ならびに段落番号を、それぞれアラビア数字で付している。以下同様。

[2] 道徳の非実在性

[引用-3]

「悪徳だと認められる行為、たとえば故意の殺人について考えてみよう。あらゆる観点から故意の殺人について検討して、「あなたが悪徳と呼ぶ事実、つまり実在するものを見出すことができるかどうか」考えてみよう。故意の殺人をどんな仕方で取り扱おうと、あなたはある種の情念、動機、意志の働き、そして思惟しか見出さない。この場合、それ以外の事実は一切存在しない。あなたが対象[のみ]を考察している限り、悪徳はあなた[の心の中]から完全に消えてしまう。あなたが**自分の反省を自分自身の胸の内へと向け**、 そして、自分のうちに生じ、この[故意の殺人という]行為へと向けられる**否認の感情**を見出すまで、悪徳を見出すことは決してできないのだ。

[確かに、]ここには事実がある。だが、この事実は**感じの対象**ではあるが**理性の対象**ではない。この事実はあなた自身の内にあるのであって、対象の内にあるのではない。それゆえ、あなたが何らかの行為や性格が悪徳であると宣言するときに意味しているのは、「あなたの本性の構造から、その行為や性格について熟慮することによって、**非難の感じ**、ないし**感情を抱く**」ということに他ならない。」

(T 3.1.1.26、[ ]内は林による補足。ボールドは林による強調。以下同様。)

まとめ

[1] 道徳の実践性

※「信念(理性が取り扱う)-欲求(感情の領域に含まれる)」モデル

例えば私が、授業を終え、帰宅して風呂から上がった後、喉が渇いたのでビールを飲もうと、おもむろに冷蔵庫に手を伸ばしたという行為を考えてみよう。「信念-欲求」モデルによれば、その行為が遂行される際には、冷蔵庫にはキンキンに冷えたビールが入っているという「知識or信念」と、何か冷たいものを飲みたいという「欲求」があったということになる。ここで注目すべきは次の二点である。まず、(1)「信念-欲求」モデルにおける「信念」は、それ自体が単独で行為を動機づけることはなく、何かを飲みたいという「欲求」がなければ、冷蔵庫を開けるという行為には決して至らない。それゆえ、信念は客観的ではありえても、動機付けの力を持たないものとなる。次に、(2)行為を引き起こすときに不可欠とされる「欲求」は、世界がどうなって欲しいかor

どうあるべきかを表す心理状態とされる。そのため、実際の世界のあり方に照らして「欲求」というものの真偽が決まるわけではない。その意味で、行為を引き起こす「欲求」は主観的なものだということができる。

現代における「メタ倫理学」という領域では、ヒュームに由来するとされる「信念-欲求」モデルでもって行為者の心理状態を捉える、というのが一般的。この点は、ヒュームの功績！

[2] 道徳の非実在性

「道徳的善悪」ということで意味されているのは、被観察者の一連の行為を見ることで、観察者が「是認や否認の感情を抱く」ということ。

⇔ 個人的な是認(スキ)・否認(キライ)の感情をもとにして下された判断を、「道徳」判断としてよいのか？　⇒ 道徳判断とは、「客観的」なものではないのか？

ヒューム道徳哲学における道徳判断の仕組み 再検討

1. 道徳判断とは、行為者の性格に対して下されるもの
2. ほとんどの道徳判断には「共感」というものが関与
3. 「共感」のブレを補正するための「一般的観点」という装置

[引用-4]

「ある性格が一般的に、われわれの個別利害に関わりなく考察される場合にのみ、その性格は、それを道徳的に善い・悪いと呼ぶような感じ・感情を引き起こす」(T 3.1.2.4)

◆「個別利害に関わらない」

⇒道徳判断を下す際に抱かれる感情は、判断を下す当人の(に関わる)感情ではない！

⇒ Q：では、道徳判断を下す際に抱かれる感情はどこからきたの？

⇒ A：「共感」を通じて、他者から。

共感sympathy

相手の顔つきや会話に表れる様子・態度から、その人の感情を推測し、その結果、相手と同じような感情を獲得する能力のこと

※ 注意：「共感」≠哀れみ、同情

共感の問題点

共感は、判断を下す人の立場や状況の変化に応じて、当人に様々な感情を抱かせる。特に、赤の他人よりも家族や仲の良い友人に対して強く働く(えこひいき)

一般的観点general point of view

[引用-5]

「…我々一人一人が性格や人物を、それらが個人の特殊な観点から、現れるままに考察しようとするならば、我々が合理的な言葉によって意見を交わすことは不可能であろう。それゆえ、そうした絶えざる不一致を防ぎ、事物についての一層安定した判断に至るために、ある**不動かつ一般的な観点**を我々は定め、そして自分達の目下の状況がどんなものであれ、我々が何かを考える際には、常に自分達をその視点に置くのである。」(T 3.3.1.15)

[引用-6]

「われわれは、人物の道徳的性格に関して判断を下すために、**その人物が活動する、狭い範囲の仲間たち**narrow circleへと、自分の視線を限定する。」(T 3.3.3.2)

[引用-7]

「各個人の快や利益は異なっているので、もしも彼らがある**共通の観点**を選択しないのならば、彼らの感情や判断において、合意することは不可能であったろう。この共通の観点から彼らはその対象を眺め、この観点によってその対象は、**観察者全員にとって同じように見える**のである。」(T 3.3.1.30)

道徳の4つの源泉

1. 他者にとって有用
2. その人自身にとって有用
3. 他者にとって快適
4. その人自身にとって快適

まとめ

1. 道徳判断 ＝ 一般的観点から眺めたときに是認・否認の感情を抱くこと
2. 客観的判断に至るための、他者との意見の対立
3. ナローサークルで実際に下されている判断が「道徳」判断の基準(一般的観点)

問題点

・道徳というものの範囲の狭さ？ ⇔ 道徳性の(論理的)要件として、R. M. ヘアは「普遍性」を挙げる

・多数者の専制？多数者の利益の貫徹によって少数者が抑圧されるのではないか？(トクヴィル、J. S. ミルらによる懸念)

----------◆----------◆----------

参考文献

・Hume, D. [1739-40] *A Treatise of Human Nature*. Edited by Norton, David Fate. Norton, Mary J. 1st Ed Oxford University Press, 2000

〔翻訳〕ディヴィド・ヒューム『人性論』1-4 巻、大槻春彦訳、岩波文庫、1948-1952 年；デイヴィッド・ヒューム『人間本性論』第一巻 知性について、木曾好能訳、法政大学出版局、1995 年

・Kant, I. [1785] *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, Hrsg. von Karl Vorländer. Hamburg: Meiner, 1994

〔翻訳〕I. カント『道徳形而上学の基礎づけ』宇都宮 芳明 訳、以文社、2004年

・伊勢田 哲治[2008] 『動物からの倫理学入門』名古屋大学出版会

・内井 惣七[1988] 『自由の法則 利害の論理』ミネルヴァ書房

・有福、坂部 編[1997]『カント事典』弘文堂

・日本イギリス哲学会 編[2007]『イギリス哲学・思想事典』研究社

・大庭 編[2006]『現代倫理学事典』弘文堂